

結果重視と理系離れ

藤岡 加奈[†]

Results-Oriented Culture and Declining Numbers of Science Student

Kana FUJIOKA[†]

最近の学生の気質についての話を聞く機会がありました。もちろん、その気質を肯定、否定するのが目的ではなく、彼らをよく理解し、世代を隔てていても上手くコミュニケーションをとっていく術を考えるためです。彼らは、いわゆるZ世代でデジタルネイティブであり、コストパフォーマンスよりタイムパフォーマンスを重視し、価値観の現れでもある消費スタイルは社会的・文化的に意味のあるものに投資するイミ消費だそうです。X世代からすると違和感のあることもありました。全般として「悪くない」と感じました。ただ、一つ見過ごせないと思うことがありました。それは、「結果が出なければ、それまでのプロセスは全て無意味だと思うため、結果の見えないことには消極的である傾向にある」ということです。この気質には、危機感を感じました。新しいことや初めてのことに挑戦する場合、上手くないことが多いかも知れませんが、失敗や挫折から学ぶことは多く、その経験はいつか役に立つはず、ということを感じることなく、新しいことに挑戦するのはとても辛いことだと思います。理系の研究分野においても同様で、良い見立てて研究をスタートし、初めからトントン拍子に進み、良い結果が得られることもあるでしょうが、実際のところは、失敗の繰り返しで、一見意味のないように見えていた失敗がいつか結果を導き出すことの方が多いのではないのでしょうか。また、その失敗で得られた経験が他の研究に役立つことも少なくないと思います。発明王トーマス・エジソンのあまりにも有名な言葉「失敗は成功の母」に勇気づけられるZ世代は少数派になってしまったのでしょうか。アルベルト・アインシュタイン先生の「挑戦しないことが一番の失敗」という言葉は、「失敗や挫折をしたことがない人は、新しいことに挑戦したことがないに等しい」と解説されていますが、この言葉に鼓舞されるZ世代も少数派だと思うととても残念です。

何故、Z世代は、結果が出なければ、それまでのプロセスは全て無意味だと思うようになってしまったのでしょうか？そこで改めてお伺いします。「先生方、上司の皆さん、お父さん、お母さん、生徒、学生に、部下に、子供に結果重視の報告を求めていますか？」社会全般的に省エネルギー化、効率化、スピード化が追求されるようになり、合理的で便利になった反面、結果重視となりプロセスが後回し、軽視されるようになってしまったのでしょうか。おそらく、結果を求める人は、プロセスが無意味でないことを認識しているでしょう。しかし、結果を求められる人はどうでしょう。特に若い人、このような環境で育った人が無意識のうちに結果が出なければ、それまでのプロセスは無意味だと思ってしまうのは無理もないような気がします。省エネルギー化、効率化、スピード化、どれも大事で素晴らしいですが、プロセスの重要性も理解した上で進めなくては、思いもよらぬことが起こる。その思いもよらぬことの一つがこれまで述べてきたことで、理系離れの原因にもなっているような気がします。

昨年の5月に政府が理系分野を専攻する大学生の割合を2032年頃までに現在の35%から50%程度に増やす目標を掲げたことは皆様ご存知のことと思います。そして、政策として、デジタルや脱炭素といった成長分野の学部設置を促す基金創設や理系学生への奨学金拡充などが目白押しだそうです(朝日新聞デジタル2022年7月18日記事より引用)。政策は他にもあるのですが、これでは一時的に理系学生数は増えたとしても、質が伴わない、継続しないといったことにならないか心配です。目標を達成しやすく、得られた結果が分かりやすい政策のようですが、これも一種の結果重視に見えてしまいます。そろそろ結果重視を卒業してプロセスにも目を向け、「結果の見えることにだけ取り組むのは退屈だ。」と思う若者を取り戻すことが理系離れの歯止めの一助となるのではないかと思います。

最後に、読者の皆さまより「そんなこと、分かっているよ。」とお叱りを受けそうな内容ではありますが、分かっている当たり前のことは、珍しいことの後回しになり、そのうち忘れられることが多いと思ひ、あえて執筆させて頂きました。

[†] 大阪大学 レーザー科学研究所 (〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-6)

[†] Institute of Laser Engineering, Osaka University, 2-6 Yamada-oka, Suita, Osaka 565-0871